



第64回 日本生殖医学会九州支部会

会 長

蔵本 武志

蔵本ウイメンズクリニック

● 第64回 日本生殖医学会九州支部会 ●

日 時：平成19年 4月22日(日) 9:00～16:06

評 議 員 会	9:00～ 9:20
総 会	9:20～ 9:30
一般学術講演会	9:30～12:50 13:50～16:06

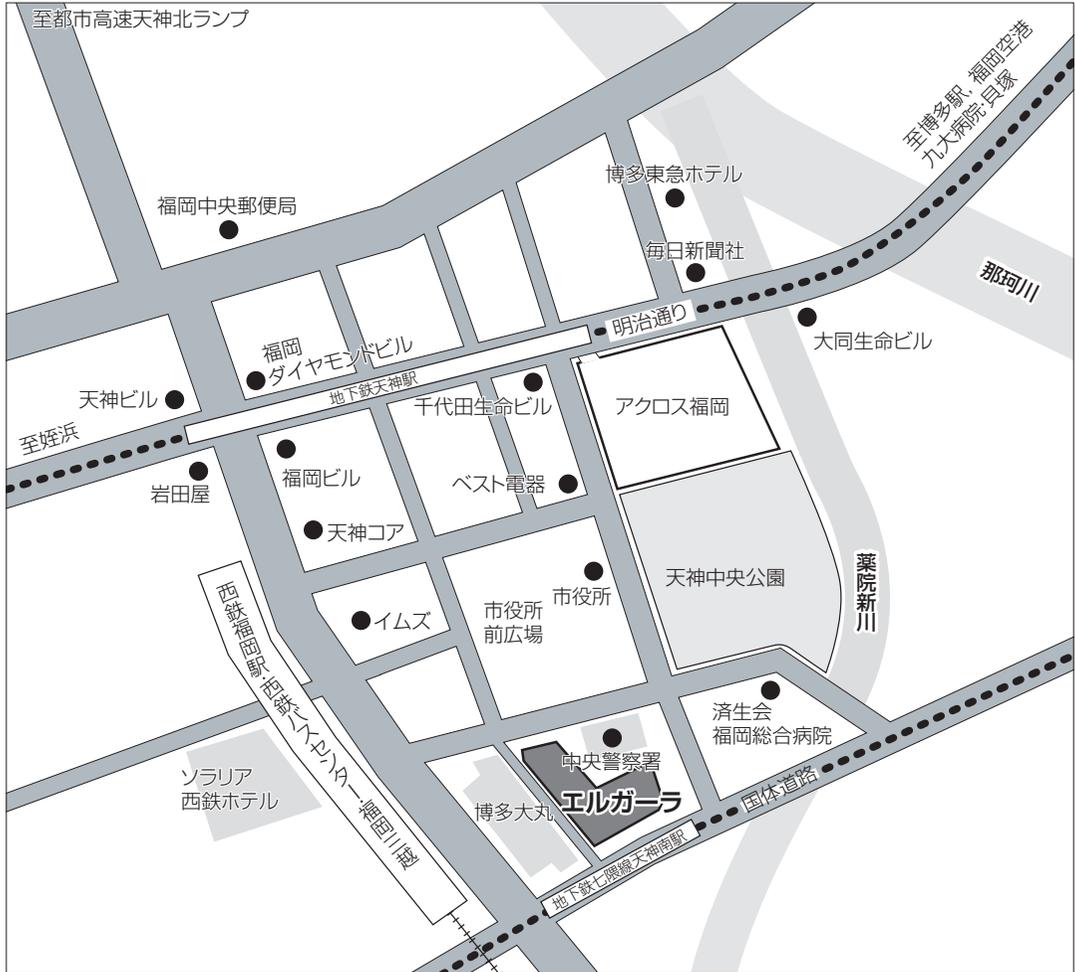
会 場：エルガーラホール 7階中ホール
福岡市中央区天神1-4-2
TEL (092)711-5017

会 長 蔵本 武志
(蔵本ウイメンズクリニック)

〒812-0013 福岡市博多区博多駅東1-1-19
TEL 092-482-5558
FAX 092-482-1415

- 注 1. 参加費 3,000 円
2. 発表時間は発表 5 分・討論 3 分です。時間厳守でお願いします。
 3. 発表は PC パソコンによる発表のみとさせていただきます。
必ずパソコンをお持ち下さい。
 4. 学会当日はこのプログラムを必ず持参してください。
 5. 質問がある方は予め質問マイクの近くに待機しておいてください。

会場案内および会場図



- 地下鉄天神駅より 徒歩 5 分 ●JR博多駅より タクシー 10分
- 西鉄福岡駅より 徒歩 3分 ●福岡空港より タクシー 20分
- 西鉄バスセンターより 徒歩 3分

PROGRAM

開会の挨拶 9:30

会長 蔵本ウイメンズクリニック 蔵本 武志

第1群 [心理・看護Ⅰ] 9:30～10:10

座長 蔵本ウイメンズクリニック 伊藤 弥生

1 総合病院での ART における看護職が行う患者支援とその他の役割について考える

浜の町病院

○松尾 則子、松島 利恵、金丸 道子、峯松 昌子、
上野 恭子、末永 雅臣、舛田 昭三、渡辺 良嗣

2 看護師における ART 患者に対する妊娠判定日の精神的支援

～アンケート調査の結果より～

松田ウイメンズクリニック ○日高 清美、下尾崎美奈、上浦 千夏、川路 珠美、
小濱めぐみ、平田 瑠美、吉永 明美、伊藤 正信、
松田 和洋

3 CMI 健康調査による不妊症患者の健康状態について

セント・ルカ産婦人科

○酒井 操、指山実千代、上野 桂子、宇津宮隆史

4 不育症患者における精神的ストレスについての検討

長崎大学医学部産婦人科

○井上 統夫、北島 道夫、増崎 英明

5 「妊娠に至らず治療終結を決意した元患者を囲む会」を開催して

セント・ルカ産婦人科

○上野 桂子、原井 淳子、門屋 英子、松元恵利子、
二宮 陸、指山実千代、宇津宮隆史

第2群 [心理・看護Ⅱ] 10:10～10:50

座長 福岡大学 井上 善仁

6 女性患者の意識調査 —不妊原因による比較検討—

セント・ルカ産婦人科 ○篠田多加子、恵良 郁絵、指山実千代、上野 桂子、
宇津宮隆史

7 不妊症カップルの生殖補助医療に関する態度研究

九州大学医学部保健学科 ○丸山 マサ美
蔵本ウイメンズクリニック 蔵本 武志、福田貴美子

8 当院において ART にて妊娠した児の出生後調査

竹内レディースクリニック ○内村 知佳、永井由美子、立石こずえ、小田原佳子、
竹内 美穂、竹内 一浩

9 生殖看護ケアレベルの識別に Triage (トリアージ) を利用した受持ち看護制の効果

蔵本ウイメンズクリニック ○福田貴美子、中村 静、久保島美佳、森 優織江、
金子 清美、池田 美樹、大塚未砂子、吉岡 尚美、
蔵本 武志

10 地域における生殖看護ネットワークの構築をめざして

—生殖看護勉強会の効果を探る—

浜の町病院 ○金丸 道子、松尾 則子、峯松 昌子
蔵本ウイメンズクリニック 久保島美佳、福田貴美子
フラウエンハウス加来 加来 久美

第3群 [診断・検査] 10:50～11:22

座長 長崎市立市民病院 藤下 晃

11 子宮卵管造影検査が甲状腺機能異常合併不妊症例の甲状腺機能に与える影響

琉球大学医学部付属病院産科婦人科学教室

○銘苅 桂子、神山 茂、青木 陽一

12 リピオドール子宮腔内注入後に肺塞栓症をおこした1症例

豊見城中央病院産婦人科 ○野原 理、新川 唯彦、東 政弘、佐久本哲郎

13 妊娠初期に超音波断層法で異常妊娠が疑われた症例の分子生物学的検討

西別府病院婦人科 ○二宮 ユミ子

14 赤外分光法による非染色 X、Y 精子の識別法の開発

セントマザー産婦人科医院 ○田中威づみ、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
姫野 憲雄、竹本 洋一、鎌田 恵里

神戸大学農学部動物多様性教室

楠 比呂志

弘前大学医学部解剖学第二講座

渡邊 誠二

第4群 [その他 I 手術、その他] 11:22~11:54

座長 九州大学 加藤 聖子

15 単純子宮頸部摘出術後に不妊治療を開始した一例

九州大学病院産科婦人科 ○松下 幾恵、内田 聡子、山本 奈理、田中 義弘、
小林 裕明、加藤 聖子、和気 徳夫

16 単一卵管例に対する腹腔鏡下保存手術の検討

長崎市立市民病院産婦人科 ○上寫佐知子、三浦 成陽、佐藤 二葉、藤下 晃
長崎大学附属病院産婦人科 平木 宏一、北島 道夫、増崎 英明

17 腹腔鏡補助下に子宮鏡下手術を行った中隔子宮の3例

福岡大学医学部産婦人科 ○城田 京子、井上 善仁、伊東 裕子、辻岡 寛、
堀内 新司、瓦林達比古

18 離島での不妊治療の現状と今後の展望 奄美大島での経験から

名瀬徳洲会病院産婦人科 ○阿部 純

第5群 [ART I 卵、胚質・培養] 11:54~12:26

座長 セントマザー産婦人科医院 田中 温

19 フォリスチム(rec FSH)+GnRH アンタゴニスト法と

HMG(ヒュメゴン)+GnRH アンタゴニスト法の卵の評価の比較について

セントマザー産婦人科医院 ○永吉 基、田中 温、栗田松一郎、姫野 憲雄、
田中威づみ、竹本 洋一、楢田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春

20 電気化学的呼吸能計測によるヒト胚のクオリティー評価の有用性

セント・ルカ産婦人科 ○後藤 香里、那須 恵、熊迫 陽子、宇津宮隆史
高度生殖医療技術研究所 荒木 康久
東北大・先進医工学研究機構 横尾 正樹、阿部 宏之

21 Universal IVF Medium (Medi-Cult 社)の使用経験

高木病院不妊センター ○山本 新吾、山田 耕平、野見山真理、西山和加子、
大野 恵里、眞崎 暁子、塚崎あずさ、有馬 薫、
小島加代子、
佐賀大学医学部産婦人科 岩坂 剛

22 インキュベーター1台で同時に培養する件数が胚発生におよぼす影響

蔵本ウイメンズクリニック ○拝郷 浩佑、江頭 昭義、杉岡美智代、永渕恵美子、
田中 啓子、福田貴美子、大塚未砂子、吉岡 尚美、
蔵本 武志

第6群 [ART II 胚凍結] 12:26~12:50

座長 浜の町病院 渡辺 良嗣

23 ヒト分割期胚ガラス化保存 (Vitrification : V) 法の確立

—初期胚2段階評価法とガラス化保存時の耐凍剤平衡化時間に関する検討—

IVF 詠田クリニック ○泊 博幸、本庄 考、高原 慶子、国武 克子、
池辺 慶子、渡辺 久美、石田 弘美、愛甲恵利子、
詠田 由美

24 当院における全胚凍結の現況 —適応と妊娠成績—

IVF 詠田クリニック ○本庄 考、泊 博幸、高原 慶子、国武 克子、
池辺 慶子、渡辺 久美、石田 弘美、愛甲恵利子、
詠田 由美

25 再凍結した胚盤胞移植の有用性の検討

蔵本ウイメンズクリニック ○田中 啓子、江頭 昭義、杉岡美智代、永渕恵美子、
拝郷 浩佑、福田貴美子、大塚未砂子、吉岡 尚美、
蔵本 武志

第7群 [男性不妊] 13:50～14:14

座長 セント・ルカ産婦人科 宇津宮隆史

26 当院の採精から AIH までの精液の保存方法に関して

松田ウイメンズクリニック ○小濱めぐみ、川路 珠美、平田 瑠美、日高 清美、
下尾崎美奈、上浦 千夏、伊藤 正信、松田 和洋

27 非閉塞性無精子症の超音波診断①：US による精細管の観察は可能か？

天神つじクリニック ○成吉 昌一、辻 祐治

28 当院を受診した男性脊髄損傷患者における造精機能障害についての検討

セントマザー産婦人科医院 ○粟田松一郎、田中 温、永吉 基、姫野 憲雄、
田中威づみ、竹本 洋一、鍛田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春

第8群 [ARTⅢ 受精・着床前診断] 14:14～14:46

座長 鹿児島大学 沖 利通

29 当院における配偶者間人工受精(AIH)妊娠症例の検討

ART 女性クリニック ○銭 暁喬、小牧 麻美、篠原真理子、柴田 典子、
小山 伸夫

30 精子サバイバルテストと体外受精における受精率に関する研究

竹内レディースクリニック附設高度生殖医療センター

○菱沼 俊樹、福元由美子、山田 裕子、遊木 靖人、
立石こずえ、小田原佳子、永井由美子、竹内 美穂、
竹内 一浩

31 体外受精胚の胚盤胞における染色体数の正常性についての検討

セントマザー産婦人科医院 ○竹本 洋一、田中 温、永吉 基、栗田松一郎、
姫野 憲雄、田中威づみ、鍛田 恵里、赤星 孝子、
馬原 千春

弘前大学医学部解剖学第2講座

渡邊 誠二

32 染色体異常に起因する習慣性流産の着床前診断の臨床応用

セントマザー産婦人科医院 ○田中 温、永吉 基、栗田松一郎、姫野 憲雄、
田中威づみ、竹本 洋一、鍛田 恵里

神戸大学農学部動物多様性教室

楠 比呂志

第9群 [ARTIV 胚・難治症例] 14:46～15:10

座長 熊本大学 本田 律生

33 Laser assisted ICSI の有用性の検討

竹内レディースクリニック ○福元由美子、遊木 靖人、山田 裕子、菱沼 俊樹、
立石こずえ、小田原佳子、永井由美子、竹内 美穂、
竹内 一浩

34 胎盤抽出エキスの体外受精への応用

蔵本ウイメンズクリニック ○大塚未砂子、吉岡 尚美、江頭 昭義、杉岡美智代、
疇津 美佳、福田貴美子、蔵本 武志

**35 ART 難治症例に対する EPA (eicosapentaenoic acid ; エイコサペンタエン酸)
治療の試み**

IVF 詠田クリニック ○詠田 由美、本庄 考、渡辺 久美、石田 弘美、
愛甲恵利子、泊 博幸、高原 慶子、国武 克子、
池辺 慶子

第10群 [PCOS] 15:10~15:34

座長 大分大学 河野 康志

36 多嚢胞性卵巣症候群におけるレジスチン測定とその意義

大分大学医学部産科婦人科 ○河野 康志、弓削 彰利、古川 雄一、松本 治伸、
福田淳一郎、榎原 久司

37 多嚢胞性卵巣症候群における不妊症治療としての腹腔鏡下手術の役割

古賀総合病院 ○肥後 貴史、高橋 典子、山内 綾、長山 由佳、
陶山 真美

38 多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)における生化学的アンドロゲン過剰症の評価に関して

長崎大学医学部産婦人科 ○北島 道夫、梅崎 直子、大石 瞳、今村 健仁、
カーン カレクネワズ、平木 宏一、井上 統夫、
増崎 英明

第11群 [その他Ⅱ 子宮外妊娠、その他] 15:34～16:06

座長 久留米大学 堀 大蔵

39 残存卵管破裂を起こした子宮内外同時妊娠の一例

熊本大学医学部産婦人科 ○岡村 佳則、永吉裕三子、荒金 太、本田 律生、
大場 隆、片渕 秀隆

40 比較的稀な子宮筋層内妊娠3例について

北九州健診診療所産婦人科 ○桑崎 雅
大牟田天領病院産婦人科 吉田 耕治

41 14歳女子に発生した卵管水腫茎捻転の一例

福岡大学医学部産婦人科 ○福岡三代子、城田 京子、井上 善仁、瓦林達比古

42 マウス胚を用いた採卵時における麻酔薬が及ぼす毒性の検討

セント・ルカ産婦人科 ○那須 恵、後藤 香里、長木 美幸、宇津宮隆史

日本生殖医学会九州支部長挨拶

閉会の挨拶

会長 蔵本ウイメンズクリニック 蔵本 武志

一般演題

1. 総合病院での ART における看護職が行う患者支援とその他の役割について考える

浜の町病院

○松尾 則子、松島 利恵、金丸 道子、
峯松 昌子、上野 恭子、末永 雅臣、
舛田 昭三、渡辺 良嗣

看護職が行う不妊治療への支援は、不妊認定看護師、不妊カウンセラー、IVF コーディネーターが中心になっているが、それぞれの役割は明確ではなく認定者自身も違いを認識しているのか、患者はその違いで恩恵を受けているのか不明である。ART の現場での看護職の行う患者ケア及びその他の役割を考察した。

認定における定義では、日本看護協会は不妊認定看護師について「不妊カップルに適切なアセスメントを行い、全人的なケアを実施し、自己決定できる」。また、日本不妊カウンセリング学会は、不妊カウンセラーは「不妊に悩むカップルを受容的に支持し情報提供を行い、自律的決定の援助をする」とし、IVF コーディネーターは、「ART を望むカップルを受容的に支持し、ART の問題点など情報提供し、自律的決定及び ART が受けやすいように援助する」とあり定義上差はなかった。治療現場での患者ケアでは役割に違いはなく、3者を区切る必要もないと思えた。むしろ認定者の勤務状況により創意工夫が必要になる。

患者ケア以外では、看護職が実施できる内容として以下が考えられる。①各スタッフ間の調整、治療環境の整備、医師への要望。②培養士間では申送書を作成、治療歴や精子データ、相談内容の伝達、培養室から治療状況をもらい連携を図る。③患者別ファイル作成、資料を基に治療結果を出し現状の把握に努める。

2. 看護師における ART 患者に対する妊娠判定日の精神的支援 ～アンケート調査の結果より～

松田ウイメンズクリニック

○日高 清美、下尾崎美奈、上浦 千夏、
川路 珠美、小濱めぐみ、平田 瑠美、
吉永 明美、伊藤 正信、松田 和洋

【目的】 一般不妊治療に比べ、生殖補助医療を受ける患者は、精神的、身体的、経済的により大きな負担を負わなければならない。なかでも、治療が不成功に終わった時は、失望が大きく、精神的苦痛を最も受ける時期と言われている。当院では、判定日に妊娠反応が陰性であった ART 実施患者に対し、不安・ストレスの軽減支援を目的として、妊娠判定直後に看護師が患者の思いを聴く形で関わっている。今回、患者の精神的支援の評価を目的としてアンケート調査を行ったので報告する。

【対象・方法】 2006年6月～10月の間に ART による胚移植を実施し、判定日に妊娠反応陰性で、看護師が別室で思いを聴き関わった57症例66周期にアンケート調査を行った。

【結果】 治療過程で最もストレスを感じる時期は、胚移植から妊娠判定日までの間35.7%、妊娠判定日31.4%であった。妊娠判定日の看護師の関わりは必要61.2%、必要ない6.1%、どちらでもよい24.5%であった。

【まとめ】 ART を受ける患者が最もストレスを感じる時期が、胚移植から妊娠判定日までの間であることが明らかになった。妊娠判定日だけでなく、治療開始時から患者との信頼関係を構築しサポートしていくことが大切である。妊娠判定日の看護師の関わりを6割の方が必要と答えており、今後は、患者の生活背景や治療への理解度などの個別性を十分考慮加味した精神的支援ができるようにしていきたい。

3. CMI 健康調査による不妊症患者の健康状態について

セント・ルカ産婦人科

○酒井 操、指山実千代、上野 桂子、
宇津宮隆史

【目的】 1997年当院ではCMI健康調査表による不妊症患者の心理評価について報告した。その結果を踏まえ、今回我々は初診時と妊娠に至り分娩施設紹介時にCMI健康調査を実施したので報告する。

【対象及び方法】 2001年2月から2003年5月、当院を受診した初診女性患者433名、分娩施設紹介となった患者184名にCMI健康調査を配布し、後日回収ポストにて回収した。

【結果】 初診時神経症傾向の高かったグループⅣの患者の60%が治療を諦めており、そのうちの90%が初診から半年以内に治療を諦めていた。他のグループⅠ～Ⅲとの間に有意差が認められ、グループⅣの患者は治療が長続きしないという結果を得た($p < 0.05$)。治療を諦めた患者では、グループに限らず半年以内に治療を諦めている人が過半数以上にのぼることが分かった。グループⅣの患者でも半年から2年の間に妊娠に至っていることが把握できた。分娩施設紹介時のCMIの結果、グループⅣの患者が治療を諦める割合が多いということもあり健康度の高いグループⅠが初診時と比較して有意に増加した($p < 0.01$)。分娩施設紹介時は体調が回復するという結果を得た。

【考察】 前回の調査と同様に初診時神経症傾向の高い患者は通院期間が短いことが再確認された。そのような患者は特に治療初期のサポートが重要であると考えられる。

4. 不妊症患者における精神的ストレスについての検討

長崎大学・医学部・産婦人科

○井上 統夫、北島 道夫、増崎 英明

【目的】 近年不妊治療に伴う精神的ストレスに対しては調査が行われているが、不妊症患者についてはあまり調査されていない。そこで、不妊症患者における精神的ストレスについて、簡易調査票を用いて明らかにすることを目的とした。

【方法】 不妊症外来を受診した患者(RPL群)15例を対象とし、簡易質問表による調査を行った。また対照として、産婦人科女性医師(D群)8人および一般女性(W群)5人に同様の調査を行い比較検討した。

【成績】 SRQ-DスコアはRPL群で他の2群より有意に高かった。(RPL群 vs D群 vs W群; 9.9 ± 5.0 , 6.6 ± 2.4 , 3.8 ± 2.4 , $P=0.01$)。Impact of event scaleはRPL群で他の2群より有意に高かった(RPL群 vs D群 vs W群; 20.5 ± 12.5 , 6.0 ± 10.3 , 15.2 ± 12.3 , $P=0.02$)。SRQ-Dで境界域以上となるものが、RPL群で33.3%、D群12.5%、W群0%であった。SDSで中等度以上とされたものは、RPL群で20%に認められたのに対し、D群およびW群では1例も認めなかった。

【結論】 不妊症患者は、全体的にストレスを表すスコアが高かった。またその中には強い精神的ストレスを受けているものが存在した。そのような例では、専門家にコンサルトすることも考慮する必要があるかもしれない。

5. 「妊娠に至らず治療を終結を決意した元患者を囲む会」を開催して

セント・ルカ産婦人科

○上野 桂子、原井 淳子、門屋 英子、
松元恵利子、二宮 睦、指山実千代、
宇津宮隆史

【目的】近年の生殖医療の進歩により、患者へ多大な恩恵がもたらされている一方、患者の「治療終結に対する意思決定」における困難さは増大していると思われる。そこでわれわれは患者サポートの一環として2004年より年に一度、「治療終結を決断した元患者を囲む会」を開催し、治療終結に対する患者の思いを聞く機会を設けている。会の参加者の特徴とその後の転帰を検討したので報告する。

【対象・方法】外来に掲示した「ご夫婦二人だけの人生を選ばれた元患者さんのお話が聞けます！」というポスターを見て参加を希望した患者は2004年16名(内男性2名)2005年15名(内男性3名)2006年12名(内男性2名)であった。

【結果・考察】2004年の女性参加者の平均年齢は41.1歳、平均治療期間は4年2ヵ月であった。参加15名中6名が会参加後平均8ヵ月で治療終結を決断し4名が積極的な治療を中止していた。2005年の平均年齢は40.2歳、平均治療期間は3年、参加12名中その後4名が平均5ヵ月で治療を終結し、2名が中断している。2006年の平均年齢は39.5歳、平均治療期間は3年5ヵ月であった。参加者の感想からこの会への参加が治療終結についてより深く考える機会になったと思われるが、3年連続で参加した患者も見られ、終結の決断における困難さがうかがわれた。今後共、この方面の支援のあり方について検討していく事が望まれる。

6. 女性患者の意識調査 —不妊原因による比較検討—

セント・ルカ産婦人科

○篠田多加子、恵良 郁絵、指山実千代、
上野 桂子、宇津宮隆史

【目的】2006年男性側に不妊原因があり、妊娠に至った女性患者の気持ちについて調査を行った。今回、我々は不妊原因から女性患者側の気持ちの検討をしたので報告する。

【対象・方法】2006年10月から12月、治療中の女性患者115名に質問紙を配布し、診察終了後に回収した。回収率は97%であった。

【結果】医師より不妊原因についてどのような説明を受けているかという質問に対し、40%が女性側のみの原因、10%が男性側のみの原因、37%は女性側と男性側双方に原因があると答えた。原因不明と答えた患者は13%であった。女性側のみに原因があると答えた患者の内、56%が「妊娠できないのでは」と答え、「夫に対して申し訳ない」と答えた人も53%いた。一方、男性側のみの原因と答えた患者の内、「妊娠できないのでは」と思った人は9%と少数であり、「夫の気持ちを思うとつらかった」が64%と最も多く、次に「できることはしてあげたい」が36%であった。不妊原因に関らず、治療については「前向きに進めたい」と答えた女性患者は80%以上であった。

【考察】女性患者は自分に原因がある場合、男性側のみに原因がある場合より妊娠への不安が大きかった。男性不妊に対して否定的な感情を抱くことは比較的少なく、相手を思いやる気持ちをもって治療に臨む女性患者が多いことがわかった。この結果を踏まえ今後の患者夫婦のサポートにつなげていきたい。

7. 不妊症カップルの生殖補助医療に関する態度研究

¹⁾九州大学医学部保健学科

²⁾蔵本ウイメンズクリニック

○丸山マサ美¹⁾、蔵本 武志²⁾、福田貴美子²⁾

【目的】 生殖補助医療を受けているカップル(男女)の「性的役割意識」と生殖補助医療技術に対する「態度」から、生殖補助医療に何が期待されているかを明確にする事で、生殖補助医療の内包する倫理的、法的、社会的な問題を模索する事とした。

【対象・方法】 A市B施設における治療中の不妊症カップル122名(男性58名、女性64名、回答者の年齢平均：男性 36.3 ± 4.5 歳、女性 33.8 ± 3.9 歳)について、生殖技術に対する態度の意識調査を行い、各質問項目と『子供の有無』別、『性別』に統計解析を行った。調査は、平成14年10月19日～平成15年8月27日実施した。調査票の質問項目は、フェイスシートを用意し、生活観4項目、人生観5項目、生殖技術の是非と推進8項目、AIDについて7項目、生殖医療の将来4項目、将来の家族設計・生殖技術に関する態度4項目調査した。

【結果・考察】 調査票は、「性別」/「子供の有無」と「生活観・人生観」を質問した。生殖補助技術について「子供の有無」別と関連の高い項目は、「AIDに対する態度」「営利目的でなく精子バンクとして精子を管理する事」の2項目であり、「性別」と「自分自身の不妊経験」、「身近な不妊経験者の存在」について有意差($P < 0.05$)が見られた。

8. 当院においてARTにて妊娠した児の出生後調査

竹内レディースクリニック

○内村 知佳、永井由美子、立石こずえ、小田原佳子、竹内 美穂、竹内 一浩

【目的】 ARTを受けるにあたり、児の異常を不安に思う患者は少なくない。長期予後を含め治療に同意する上で安全性の説明の重要性を感じる。本研究ではARTを受けて出生した児の成長の経過と、ARTを受け妊娠・出産した患者の心理を知り、治療に関するインフォームドコンセントのあり方を検討する目的で意識調査を行った。

【対象及び方法】 当院において平成14年にARTにて妊娠後、出産した患者に郵送にてアンケート調査を実施、また自然妊娠の出生との比較対照。

【結果・考察】 単胎ではART及び自然妊娠ともに正期産が多く、体重身長は平均値であったが、多胎に関してはART群において早産・低出生体重児が多かった。奇形に関しては共に2.4%で、自然妊娠と変わらない結果であった。

また、ART児の発育段階を乳幼児発育曲線で比較するも正常範囲内であった。

ARTを受けての妊娠に関する不安では、あるが46.5%で、流・早産の不安が多く聞かれた。児に関しての不安については、あるが37.2%で、実際に誕生するまでは、薬物等による児の異常がないかを心配する意見が聞かれた。治療を行い授かった思いは、諦めず良かった・命の大切さを感じているとの意見が多く聞かれた。具体的情報を提示した説明を積極的に行い、治療・妊娠・出産と各段階での心のケアも取り組む必要があると考えられた。

9. 生殖看護ケアレベルの識別に Triage (トリアージ) を利用した 受持ち看護制の効果

蔵本ウイメンズクリニック

○福田貴美子、中村 静、久保島美佳、
森 優織江、金子 清美、池田 美樹、
大塚未砂子、吉岡 尚美、蔵本 武志

【目的】 生殖医療を受ける多くの外来患者の中から、看護ケアレベルの難易度を識別し、ケアに反映できるシステムとして Triage (以下 Tri) を利用したプライマリーナーシング (継続受け持ち看護方式；以下 PN) を試み、その有効性について検討した。

【方法】 2006年4月から PN を導入し、ケアレベルの識別に Tri を利用した。Tri とは災害時、医療の受け入れ能力を超えた数や質の患者が存在する場合に優先順位を決め有効な治療を行う際に用いられる。この概念を利用してケアが難しい症例を識別し、従来のチームナーシング (以下 TN) に併用して PN を実施した。

【結果・考察】 受持ち看護師が看護計画を立て、看護師勉強会で Tri 評価を行った。『Tri 赤』は過去の経過がシビアで PN が必要と考えられる症例で、ART 反復不成功、治療終結、精神疾患の既往により心理カウンセラーの介入が必要な症例等が挙げられた。『Tri 黄』は、まず一周期は担当看護師を明確にし一貫したかわりや説明を必要とする症例で、セカンドオピニオン希望、初回 ART で治療不安が強い症例等が挙げられた。上記以外の症例を『Tri 緑』とし TN で対応した。従来の TN ではケアに限界を感じていたが、今回の試みでは患者のケアレベルが明確に識別でき、さらに PN のプロセスを経て、患者理解や信頼関係の構築がすすみ難治性の患者に対しても有効なケアが展開できた。

10. 地域における生殖看護ネットワークの構築をめざして

—生殖看護勉強会の効果を探る—

¹⁾ 浜の町病院

²⁾ 蔵本ウイメンズクリニック

³⁾ フラウエンハウス加來

○金丸 道子¹⁾、久保島美佳²⁾、福田貴美子²⁾、
加來 久美³⁾、松尾 則子¹⁾、峯松 昌子¹⁾

【目的】 九州地区の生殖医療に関わる看護者を対象に、年一度福岡市で生殖看護勉強会を行っている。日頃、顔を合わせる機会の少ない者同士が意見交換を行い、生殖医療により妊娠した患者の問題点をどのように共有していくか、勉強会で出された意見やアンケート結果から、検討課題と勉強会の効果を探った。

【方法】 平成 16～19年に開催。要領：1. 事例提供 2. グループ討議 3. 発表。アンケート：参加者 28 名に勉強会の評価、今後の要望についてリッカート尺度と自由回答を用い調査した。無記名式自由投函で回収。データの解析に於いては匿名性により個人情報保護した。

【結果】 これまでの勉強会の経過で、生殖医療により妊娠した患者の抱える心理・社会的問題について、転院先や地域への情報提供が不十分で、適切な継続看護が障害されている実体が明らかとなった。解決策として看護添書の有効性が認識された。また、アンケートでは「勉強会は生殖看護の地域ネットワーク作り」や「情報・リソースを知ること」に役立つと評価された。

【考察】 患者の抱える心理、社会的情報を施設間で継続するには、看護添書が有効と考えられるが、個人情報保護法に抵触しない添書のあり方など検討課題として残った。グループ討議を中心とした参加型勉強会は、意見交換により地域の問題やお互いの経験を共有でき、地域の看護ネットワークを構築することに有効である。